

〔川崎医療福祉学会ニュース〕

川崎医療福祉学会 第13回 研究集会プログラム

平成 9 年11月26日

研究発表

1. 作業, そして作業療法の本質
川崎医療福祉大学 リハビリテーション学科 福意 武史
2. 在宅高齢者の配食サービスの検討
—— 調理済み冷凍弁当式宅配食の有用性について ——
川崎医療福祉大学 臨床栄養学科 ○平野 宏
川崎医療福祉大学大学院 臨床栄養学専攻 田淵 裕野
3. 痴呆性老人に対する言語的コミュニケーション形成の実践的試み
—— 中間報告から ——
山口県立大学 看護学部 三原 博光
4. 長寿文化と死生観について
—— 琉球文化圏における調査研究から ——
川崎医療福祉大学 医療福祉学科 近藤 功行
5. 社会福祉現場実習での事故を防ぐための危険予知訓練 (KYT) についての研究
川崎医療福祉大学 医療福祉学科 ○田口 豊郁 竹内 一夫 八木 新緑
真野元四郎 田淵 創 小島 晴洋
宮岡 京子
6. 特別養護老人ホームにおける死についての多角的検討 (第2報)
—— 全国の特別養護老人ホームにおける死の実態調査から ——
川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 ○野村 京平 横山由美子
内田富美江 平山 賀美
川崎医療福祉大学 保健看護学科 人見 裕江
川崎医療福祉大学 臨床心理学科 進藤 隆子
川崎医療短期大学 看護科 清田 玲子 塚原 貴子
旭川荘敬老園 西村 茂子
河田病院 揚野裕紀子
福山福祉専門学校 徳山ちえみ
特別養護老人ホーム宇甘川荘 松村 文恵
川崎医療福祉大学 医療福祉学科 宮原 伸二
○印は口演者

講演

「私の辿った道」

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 緒方 正名

研究発表要旨

作業，そして作業療法の本質

—— 学生のイメージと教育の在り方について考える ——

川崎医療福祉大学 リハビリテーション学科 福意 武史

作業療法の本質は，作業を目的・対象・方法の三位一体となったテーマとして捉えることである。しかし，作業療法は，他者や学生から多く誤認される。そこで，学生に作業と作業療法におけるイメージ調査を行った。

その結果，作業という言葉は一般に負のイメージが強く，学習期間の少ない者ほど方法として捉え，学習が進むにつれて三位一体の捉え方になることなどが分かった。

よって，教育において，作業療法の本質を早く実感させることが重要であると考えた。

在宅高齢者への配食サービスの検討

—— 調理済み冷凍弁当式宅配食の有用性について ——

川崎医療福祉大学 臨床栄養学科 平野 宏

川崎医療福祉大学大学院 臨床栄養学専攻 田渕 裕野

調理済み冷凍弁当を利用した在宅高齢者への配食サービスを行い，配食の至適方法を検討した。倉敷市中庄地区に在住する，70歳以上の独りまたは夫婦二人暮らしの24名を対象とした。電子レンジ対応の調理済み冷凍弁当を用い，1日2食（昼，夕）を4週間喫食した。冷凍食品は安全性，経済性に優れ，調理済み弁当は利便性，栄養的に優れていた。栄養士の宅配時の訪問は，栄養指導に加えて精神的サポートに有用であった。

痴呆性老人に対する言語的コミュニケーション形成の実践的試み

—— 中間報告から ——

山口県立大学 看護学部 三原 博光

痴呆性老人に心理療法の技術の一つである行動療法を適用したときの中間報告である。この痴呆性老人の被害妄想の言語的表現数を減少することに，治療目標が置かれた。治療方法としては，被害妄想の言語的表現に対しては消去，被害妄想ではない言語的表現に対しては，言語的賞賛の正の強化が行われた。その結果，治療介入時は，被害妄想の言語的表現は減少したが，治療終了後，再び，被害妄想の言語的表現が出現した。治療終了後も被害妄想の言語的表現の回数を減少させることが今後の治療的課題である。

長寿文化と死生観について

—— 琉球文化圏における調査研究から ——

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 近藤 功行

演者は琉球文化圏における終末期ケア・死亡場所・死生観等「死」をめぐる調査研究に着手して10年が経過した。同地域における長寿科学研究の遂行上，社会文化的要因とりわけ死生観の側面は残された研究課題であると思われる。本発表ではさらに長寿研究の話題を一步進め，《適寿 (appropriate age)》という演者の提唱する用語を紹介した。死生観教育が学校保健などでも取り沙汰されているなかで，長寿科学研究の位置づけを述べた。

社会福祉現場実習での事故を防ぐための危険予知訓練（KYT）についての研究

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 田口 豊郁 八木 新緑 竹内 一夫
田淵 創 真野元四郎 宮岡 京子
小島 晴洋

本学科の学生は、社会福祉施設で4週間以上の実習をしている。実習中には、事故にまではいたらないが、「ヒヤリ」とか「ハット」する場面が多くあることは、容易に想像できる。本研究では、実習現場での事故を防ぐための安全教育プログラムの作成を目的とした。大学生269人を対象に家庭内の“事故”及び“ヒヤリ・ハット”体験を調査した。その結果、高齢者では、発生時刻：夜と朝、発生場所：階段、事故内容：転倒（＞50％）——が多かった。

特別養護老人ホームにおける死についての多角的検討（第2報）

—— 全国の特別養護老人ホームにおける死の実態調査から ——

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 野村 京平 横山由美子
内田富美江 平山 賀美
川崎医療福祉大学 保健看護学科 人見 裕江
川崎医療福祉大学 臨床心理学科 進藤 貴子
川崎医療短期大学 看護科 清田 玲子 塚原 貴子
旭川荘敬老園 西村 茂子
河田病院 揚野裕紀子
福山福祉専門学校 徳山ちえみ
特別養護老人ホーム宇甘川荘 松村 文恵
川崎医療福祉大学 医療福祉学科 宮原 伸二

現在、特別養護老人ホーム（以下特養）が生活の場であり、死の場所として位置づけられて来ている。特養での死の過程を重視したターミナルケアのあり方を考えるために全国133施設を対象とした実態調査を行った。施設入所者とその家族の死亡希望場所は特養が多いのに、実際には病院内死亡が多く、ターミナルケアの場の決定の困難さがうかがえた。また、特養入所者全体の死亡病名の第1位は肺炎で、施設内死亡では24時間以内の死亡（突然死）が多く、日常の健康管理の課題も示唆された。

その他に ADL 等と施設入所者との関係など、さまざまな角度からの結果を得た。

講演要旨

「私の辿った道」

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 緒方 正名

これまで研究してきた、「無カタラーゼ血液症」、「生物学的モニタリング」、「石油による海洋汚染」、「感染症（腸管出血性大腸菌、O-157）」、「施設・在宅ケア、介護者の負荷について」の5テーマについて紹介。その場所の独自性・新分野・新方法を考慮してテーマを選び、過去の栄光より現在の能力で協力者を求めて研究してきたことを紹介した。また、人生では、絶対的な自力は無理で、他力に依らなければならない多くの部分が存在する。そして高齢者は生きる希望に忠実に、感激のある人生を送ることに生きがいを見出す必要があると述べた。